

# 英語・文学教育実践報告：「英詩鑑賞」

—— 二年間の軌跡 ——

関 戸 冬 彦

## 要 旨

本報告は文京学院短期大学2年次配当の選択専門科目、「英詩鑑賞」の実践報告である。本学の新カリキュラム導入により本年度（06年度）をもって終了、閉講となるこの「英詩鑑賞」の2年間の授業内容、およびその実践を最終授業担当者であった筆者が記録したもので、近年の英語教育熱の流れの中でも注目されつつある、文学と教育をどうつなげるかに焦点をあてた内容になっている。

## はじめに

本報告は文京学院短期大学2年次配当の選択専門科目、「英詩鑑賞」の実践報告である。私は研究としてはアメリカ文学を専攻し、また本学に採用されるまで数々の高校で英語科非常勤講師を務めてきた。よって私の中では文学と教育は相反するものではなく、逆にいかにそれらを有機的に結びつけるかにずっと関心があった。また、近年の英語教育熱の流れの中でも、例えば日本英文学会などは文学教育の勉強会を立ち上げたりするなど、文学と教育をどうつなげるかに注目が集まっているようにも思える。そんな中で、私がこの2年間（05, 06年度）担当した「英詩鑑賞」の授業内容、およびその実践を文章として記録に残しておくことが本学の、もっと大きく言えば英語教育界全体の、何らかの一助になればと思い、本稿の執筆を決意した次第である。

## 1 シラバス作成とテキスト選定

本科目の担当が決まった時、まずやらなければならなかったのがシラバス作成とテキスト選定であった。新任者である私にとっては受講者数も未知数だし、本学の学生の英語のレベルや興味もよくわからず、専門度合いが高すぎても低すぎても授業として運営するのは難しいだろうとの予測のもとに、なるべく受講者全体に万人受けし、かつ短大としての授業にふさわしいものを、と思っていた。そんな時に私の目にとまったのが、平凡社から出版されている『映画で英詩入門』（松浦暢編著）であった。この本はわりと知られた映画の中にセリフとして英詩の引用があることに注目し、その該当箇所と詩の和訳（巻末には原詩を掲載）、映画の内容と

詩との関連性についても解説を加えたものである。項目別に全35もの詩と解説があり、1冊の資料としても十分に楽しめるものだった。しかしこれだけでは教科書としては不十分、あるいは授業そのものが成立しない、つまり私がこの本を読み上げるだけにすぎない、と思い、何かほかにも思っていたところ、上記の本の執筆者たちが金星堂から『The Poetry of Film — 英詩で味わう映画 —』という、より大学の教科書らしいテキストを出していることを知った。早速採用見本を取り寄せ見てみると、全20レッスン、映画の内容を要約した英文、その英文に関する質問、原詩などがあり、付属のテープには詩の朗読も入っていた。こちらのほうがより授業の教科書的であるし、英文などは英文解釈の練習としても使えるだろうとのことから、こちらを教科書として主に使い、先の本は資料として選定することにした。

では実際にこのテキストのどこを、あるいはどれをやるのか、というのが次の問題で、もちろん最初から最後まで全部やってもよいのだが、学生が誰も知らないようなものやっても退屈だろうというのと、テキストには映画そのもの（ビデオテープなど）の資料はなく、入手困難なものはそれを入手するだけでも大変だと思い、なるべく世間的な話題に上っていたり、学生が一度は観たことがあるようなものを中心に選ぶことにした。しかし、この授業はそもそも映画の授業でなくあくまで英詩の授業であったことに立ち返ると、できれば詩は通史で年代順に、かつ国、イギリスとアメリカ、をそれぞれ分けたほうが詩の授業としてはいいだろう、とのことから、前期はイギリスの詩を、そして後期はアメリカの詩を、ということにした。結果的にどういう順序にしたかは資料1（06年度のものだが、大筋では05年度の実際に行った授業の進行とほとんど変えていない）に掲載してあるのでそちらをご覧いただきたい。また、私は英語・日本語問わず、歌の歌詞も十分この授業の中で扱うにふさわしいし、学生の興味を喚起するにもいい材料だと思い、適宜歌の歌詞にも言及しようと計画した。

## 2 実際の授業の中で（05年度前期）

4月になりいよいよ開講となった。初回に集まってくれた学生は30名弱で、実際の履修登録者もほぼ同数であった。初回の授業の際に扱ったのは、「傑作とは何か」。詩でも小説でも映画でも、ある作品に触れたときに自分がどう思ったのかをよく考え、それを表現するとはどういうことかを、自分は何を傑作の定義とするのかという点から考えてもらった。この「傑作とは何か」という問いは、私が大学院時代に教わったアメリカ詩の授業でよく用いられていたもので、詩はもとより文学全体を考える上で非常に重要な問いだと当時も今もそう思っている。私は「英詩鑑賞」という授業を単に詩を鑑賞するだけでなく、文学全体へと切り込んでいくような、そんな授業にしたかったのである。さて、初回の授業に話を戻すと、この「傑作とは何か」をもとに、テキスト最初のレッスンである『ローマの休日』に入り、映画を観てもらい（私が約30分に編集したもの）、テキストの英文読解、詩と詩人の解説（今回はシェリー）、詩と映画との関係を解説した後、「『ローマの休日』は傑作か否か」という問いに答えてもらった。学生の反応はまずまずで、このスタイルでずっといっても大丈夫だろうとの感触をえたのを覚

えている。次に取り上げたのは『ロミオとジュリエット』で、これはどちらのテキストにも載っておらず（『映画で英詩入門』にはディカプリオ版のみ一部取り上げられているが）、私独自のプリントを配布して行った。これはかつて私が高校で行った授業をこの授業用に再編集したもので、当時の詳しい様子は拙論ですでにまとめてある。簡単に紹介するとディカプリオ主演の最新版と、オリビア・ハッセー主演のイタリア版とでは様々な相違点があり、その相違点を考えながらこの作品全体が傑作か否か考える、というものである。その過程においては「もし自分が映画監督になったらどのように作り直すか」のような問いを設け、単に作品を「観る」「読む」といった鑑賞の立場だけでなく作品を再構築するという創造の立場からも考えてもらった。肝心の詩はというと、有名なロミオとジュリエットの出会いの場面を取りあげ、それがソネットであるということ、両映画内でもこの場面のセリフは原詩通りであることを指摘し、『一流の朗読で聴く名文』という本に付随のCDでその朗読を聞いてもらった。従来の作品解釈を中心とした英文学講義からすれば逸脱もはなはだしいのだが、このように様々なメディアを用いることで理解しがたいというレッテルを貼られがちな「詩」にいろいろな角度からスポットをあてられたのではとと思っている。このような感じで続々と『いつか晴れた日に』とシェイクスピアのソネット116番、『ブリジット・ジョーンズの日記』とキーツ、『哀愁』とロングフェロー、『マディソン郡の橋』とイエイツを取り上げていった。ペースとしては2回の授業に1作品で、映画を観て、詩の解説をし、英文解釈、特に私は予備校で教わった構文重視の英文解釈はあらゆる英文を読む上で役に立つと思っているので、関係代名詞を含む複雑な構文、仮定法の条件省略、強調構文などに出くわすと、力を入れて解説をした。学生も、英語・英文学科だけあって、このような読解には興味を示して、時には映画の解説よりも真剣に聞いてくれた。また、その間に先にも述べた歌詞についても数回ふれた。参考までにどのような歌詞を、どのように取り上げたのか付記しておく。

ひとつは「Song of Love」で、この歌は「さくら」で有名になった河口恭吾のシングル「愛の歌」の英語版である。私はこの歌が同じトラック（伴奏）でありながら、歌詞が日本語と英語と両方あり、かつ本人が歌っていることに注目し、授業で使用することにした。まず歌詞のプリント、ただし偶数行は空欄になっているものを、を配布し、ディクテーションを行う。1回目は英語版を普通に最初から最後まで聞かせる。この際、誰の歌かという質問には答えず、あたかも洋楽であるかのように振舞っておいた。そして2回目は空欄の箇所ごとに一時停止をして、書き取りやすくする。最後にもう一度通して聞かせ、できていれば確認を、できていない場合は再度聞き取りさせる。テンポが速い曲でもなく、歌詞に使われている単語も簡単な単語なので、3度聞かせれば完璧とまではいかなくても大体わかる。その後空欄の箇所の正解を読み上げ板書し答え合わせ、さらに再度確認の意味で聞かせる。しかし、ここでは英語版ではなく日本語版を聞かせた。しかも、日本語版とは言わずに。なぜこのようにしたかということ、よほど聞き取りにくいものではない限り、答え合わせをした後はあまり集中して聞かず、寝てしまうものもある。なので、それを防ぐためにも、そしてびっくりさせるためにも、あえて日

本語にしたのである。先にも書いたように全く同じトラックなのでイントロも全く同じ、歌いだすまではわからない。日本語の歌詞を聞いたとたん驚いたり、苦笑したりしているものもいたが、聞きながらさっき書き写した英語と比べながら聞いてくれた。その後さらに日本語と英語の両方載っている歌詞カードを配り、その違いを確認させた。歌詞カードをよく見ると、英訳は河口氏本人が全てやったわけではないようだが、ネイティブとの共同翻訳というクレジットになっているので、一部ないしは原案は彼が考えたのであろう。自分の歌を英訳し、さらにはそれを歌い、聞いた日本人が洋楽と間違える、というのはなかなか高度なことである。ある意味英語を実用しているいい例だと思う。英語をただ机の上で学習するのではなく、自分の得意な分野で表現手段として使えるようになってもらいたい、というのが、私が日頃思っていることなので、これはその完成例として紹介しておきたかった。実際授業後、「CD貸していませんか？」という学生がおり、うまく興味を喚起できたのではないかとと思っている。

もうひとつは「A place in the sun」である。この曲はスティービー・ワンダーが歌ってヒットしたらしいが、私が聞いたのは日本のロック歌手、浜田省吾のものである。これは彼のライブアルバム「ROAD OUT “TRACKS”」の1曲目に収録されている。私が今回この曲に注目したのは、その日本語訳である。このアルバムには全ての曲に英訳の詞が歌詞カードに記されている。訳したのは浜田氏本人ではなく、かつてのプロデューサー須藤晃氏である。須藤氏は故・尾崎豊のプロデューサーとして一躍有名になったが、CBS・ソニーに入社した後、最初に手がけたのは浜田省吾であった。また、須藤氏は東大・英文科の出身で、在学中はアメリカの女性詩人エミリー・ディキンソンを学んでいたという。須藤氏が手がけた尾崎の曲は全て英語の副題がついているが（例えば「15の夜」は“The Night”など）、これは須藤氏の意向であることは想像にかたくない。よって私は今回、まずこの浜田省吾の歌を聞かせ、その後英語の詩が左側に、右側には傍線と空欄のみの紙を配布し、タイトル含め、直訳ではなく詞的に日本語訳を試みよう、ということにした。これは読解の授業をしているとよく感じることなのだが、学生は不安からか、私が何度「意味があてれば、てにをは、などは気にせず個々の訳でかまわない」といっても唯一絶対の訳を求めたがる。つまり、正解を教えてください、というわけである。よってこの活動はそういったものを根底から覆す、正解など存在しないものにしたのである。もちろん、単語の意味や文法を取り違えるというのは問題外なので、その点は辞書を引かせながらも、一応意味や説明を加えた。本当にやってほしいのはその後の作業、日本語にどううまく訳すか、センスの問題であって、正誤のレベルではないのである。訳すスピードに個人差があるものの約15分後には各々の訳が出来始めていた。さすがに時間にも限りがあるので、20分も過ぎた頃に「模範訳の一例」（あくまで唯一の正解でないことを強調）として、須藤氏の訳を配布した。当然であるが、みな須藤氏の訳のうまさに感心する。そしてさらに、もうひとつ「模範訳の一例」として配布したものがある。それは先に取り上げた河口氏の訳である。実は河口氏もこの曲をシングルとして発表しており、しかもそのカップリングが「愛の歌」の英語版だったのである。当然だが、須藤氏と河口氏とでも訳し方は違う。これによりな

おさら正解は一つではない、と強調した。ちなみに、ここで河口氏が歌う「A place in the sun」も聞いてもらった。当たり前ではあるが、さきの浜田氏と比べると歌い方も違えば、トラックも違う。ここにも物事の解釈がひとつではないことが垣間見える、と最後に加えておいた。

このような具合で前期の授業は終了へと向かったのだが、当然前期分の評価をしなければならない。もちろん通年の科目なので学年末にのみ正式に評価すればいいのだが、そうはいつでも一度に、あるいは何かひとつのレポートや試験でもって通年分を評価するのは大変だと判断から、とりあえず前期分に評価できる基準を用意することにした。出席や普段の小レポート（宿題など）を全て点数化し、それに加え学期末レポートと学期最終授業の際に行う筆記による小テスト（解釈に用いた英文は06年度と同じ。資料2）を課すことにした。レポートは前期に観た映画とその中に出てきた詩との関連性に言及しながら傑作か否かを考えてもらうもの、小テストはテキストの英文解釈とさらに詩に関する小問を出題した。レポートに関しては次の章で詳しく取り上げるが、小テストの英文解釈に関しては、当初は辞書なしでやってもらうつもりだったのだが、あまりにもわからなそうな感じだったので途中から辞書解禁にした。それでも正答率はそんなに高くなく、その原因は教えたはずの構文をきちんと把握しきれておらず、単語の意味をつなぎあわせてとりあえず日本語にしているという感じの訳文が多かったからである。

私が独自に作り、行った前期の授業に関するアンケートによるとやはり映画を導入したのは成功だったようで、興味を持った、あるいは、観たことがあったのに、詩が引用されているとは気づかなかった、などの意見があり、英詩というものが教科書や古い書物の中に眠る高尚で近づきがたいもの、というものから、実は身近なものなんだ、という意識へと学生を向けられたのではないかと思う。

### 3 よりレポート力をあげるために（05年度後期）

後期初回にまず指摘したのはレポートの書き方であった。前章で触れた前期末のレポートであったが、レポート作成にあたってこちらが指摘しておかなければならないと思える点があった。本当はレポートを書いてもらう前にもっと詳しく丁寧に説明してあげるべきだったと悔やまれるのだが、今さら遅く、後期分のレポートには生かしてもらおうということで指摘することにした。その最大のポイントとは、考察と感想は違うという点である。多く見受けられたのが、「私は今回～を観て～と所思いました」とあり、「傑作の定義」を明記せずに「楽しかったので、あるいは、考えさせられたので、傑作だと思思いました」と感想文になっているものである。中には自分なりの定義を決め、しっかり論証してくれた学生もいたのだが、絶対数からいけば前者のほうが多かった。私は常々レポートとは裁判のようなものだと思思っていて、例えば「～は有罪である」とするとき、その理由が「なんとなく」や「有罪だから」では、有罪にされるものはたまったものではない。確たる証拠があって初めてそれが成立するわけで、ある作

品を傑作かどうか判断するのも、その作品の身になってみれば裁判されるようなものである。ゆえに、例え恣意的な部分が多少入ってしまうにしろ、とりあえずしっかりした証拠を提示しないことには話は始まらないはずである。このことを強調し、感想文ではないレポートを今後は書いてくれるよう指摘した。ほかにも誤字脱字や、「ですます調」と「である調」の不統一などが見られるものもあったが、それはおそらく私のレポートだけに限った問題ではないだろう。

さて、後期はシラバスにもある通り、アメリカ詩からアメリカ文学へと進めていった。『今を生きる』は様々な詩人や詩の引用が登場し、詩の授業内で紹介するには大変有意義な映画である。また、映画の中で何度も登場する言葉、Carpe Diemは英語にすればSeize the Dayとなり、同名の小説がアメリカのノーベル賞作家、ソール・ベローの作品にある。ちなみにこのベローの作品は私が大学院の修士論文で扱った作品でもあり、紹介するには知りすぎているくらい知っている作品である。次は映画『卒業』を取り上げた。この映画に関連する詩はいわゆる文学からの詩ではなく、その主題歌であったサイモン&ガーファングルの歌の歌詞であり、教科書にも詩として「The Sound of Silence」が取り上げられていた。上述からもおわかりのように、私は歌詞に関してはかなりの関心と豊富な資料を取り揃えているので、また個人的にもサイモン&ガーファングルが好きだということが加わり、歌詞を分解して元の順序に並べ替えたり、タイトルを伏せておいて詩だけからタイトルを推測したりなどのゲーム的活動も取り入れた。これらは私が学生の頃から参加している英語合宿よりヒントを得たものである。

また、これら正規のカリキュラムを進めていく間にレポート作成の練習として歌詞に関するレポートを書いてもらった。私は「東京」と名の付く歌が幾つかあることに着目し、例えば近年では桑田圭佑や福山雅治ら、それらを比較してどう「東京」が描かれているのか、主人公は「東京」にどのような思いを抱いているのか、あるいは作者の「東京」観はどのようなものなのか、などを検討してもらった。詩を詳しく読み、その内容を吟味するのは「鑑賞」としては基本の姿勢であるし、作者の背景を調べたり、作品の客観的事実を知るのもひとつの解釈へのステップであるからである。普段なにげなく読み過ごしているものの中に実は隠れたメッセージがあるのではないかと考えることは詩の鑑賞だけでなくあらゆるものに対して払われるべき注意点である。間もなく卒業する学生たちの将来に必要な能力は、単に詩人や英米文学の歴史といった知識そのものではなく、詩や英米文学を研究することで学べるその研究姿勢にこそある、と私は思っているので、あえてそれを一番身近であると思われる日本の歌の歌詞で実践してもらったのである。二つのものを比較し、その相違点、共通点を見出し、さらに考察を加えるという作業は実社会においても十分ありうることであり、また学生たちがそういった機会に直面することが今後少なからずあるであろうと思う。

最後のレポートではこれらの知識、ノウハウを全て駆使して臨んでもらった。最後なのであれこれ制約は設けず、この授業を通して学んだ内容、あるいは自分が興味あることについて比較検討し、詳細な考察を加えて2000字程度で書いてもらうことにした。結果はというと、詩や

歌詞を選んだもの、シェイクスピアや英米作家の作品を取り上げたもの、中にはより大きく国同士の文化の違いを取り上げたものなど、題材としては十人十色、多種多様なレポート群となった。

一年経って振り返ってみると、やはり当初の思惑とは異なる部分もあった。そもそも授業とは学生あってのものなので、どんなに教員側が万全の準備をしたところで学生にそれをうまく伝えられなければ何の意味もない。自己を正当化するわけではないが、特に後期などは学生の反応やこれまでの経緯を考えながら、内容を組み立て吟味し、授業をしていた。よって、突然予定を変更して取り上げた項目もあれば、始まる前から計画していたのに断念したものもある。もちろんシラバスに沿うことは常に念頭にあったが、シラバス（しかも私自身が書いたもの）をこなすことが私の仕事なのか、目の前の学生の興味を引き出し臨機応変に対応していくことが私の仕事なのか、と問われれば、迷うことなく後者だと私は答えざるをえない。こうした戸惑いを全て二年目に生かすことが、今年度履修してくれた学生への間接的恩返しであると思いつつながら最終成績を提出した2月であった。

#### 4 二年目の変更点（06年度前期）

06年度は私の都合により開講時限を5時限目にせざるをえなかったため、当初は人数不足で開講不成立ではと勝手に冷や冷やしていたのだが（学生にとって開講時限は履修の上でも大きな要素のうちの一つだろうから）、その予想を覆すかのように前年度をさらに上回り40名近い履修者が集まり、教室もほぼ満員御礼状態となった。講義内容は大筋のところでは前年度を踏襲しながらも、今年度は前年度のアンケートを参考にしながら評判のよかったものはより焦点をあて、よくなかったものは改善しようと思っていた。学校が行った公的アンケートでの改善点として指摘をうけていたものの中に、「レポートが大変すぎる」というものがあり、私としても課題をたくさん課し、たくさん回収する＝たくさん紙を使う、ということにいささかの抵抗感があった。紙の使用量と課題とは別問題では、と思われるかもしれないが、実際昨年度は半期終わってみたら膨大な量になっていたし、それを点数化するだけでも大変だったが、この再利用不可の紙の山を目の前にしたら、やはりやたらと課すべきではない、と思わざるをえなかった。ならば、と思いついたのが、数年前に高校で実践していた宿題をEメールで回収するというものであった。これならば電子データのため無駄使いにならず、必要な情報のみを抽出できると同時に、学生にとってもこれら電子ツールを使いこなす、あるいはパソコン（中には携帯で）で素早く要求された内容の文章（時には英文でも）を作成できる、というのは必要な能力であり、それらを伸ばすことができる、という利点があった。とはいえ、私のところに次から次へと限りなくメールが来てしまうのもそれはそれで処理しきれなくなる恐れがあったため、私も文京アドレスを取得し、全てそのウェブ上でのメールボックスで確認することにした。そして毎回規定の締切日時を過ぎた後（締切を守るということを習慣づけるのも教育の一環）、私とそのデータを紙にまとめ、次の授業時に配布することにした（資料3）。こう

すると、一目でいろんな意見を見ることができ、かつお互い刺激になって授業導入時の話題作りには効果を発揮した。この活動は映画ごとに話題を喚起できそうな題材を選んで課し、提出状況に応じて成績にも加味している。

前期末のテストとレポートは、テストの英文解釈はほぼ前年度のものを踏襲（前出資料2）したが、レポートは若干題目を変えた。実は改めて前期に扱った映画を振り返ってみた時に、私はあることに気がついた。それは『いつか晴れた日に』と『ブリジット・ジョーンズの日記』は結末において主人公が幸せな状態で終わるのに対し、『ローマの休日』、『ロミオとジュリエット』、『哀愁』、『マディソン郡の橋』はつらい別れを選び終わる。それだけなら誰しも観れば気づくことなのだが、これらの作品の原作者が前者は女性、後者は男性とわかると、結末に託す願いが男女では違うのでは、という問いが生まれる。もちろん恣意的に選んだこれらの作品だけでこう結論づけるのはあまりに短絡的であるのは重々承知だが、問いとして立てるには面白い切り口ではないだろうか。私はそう思い、このことを授業内で説明し、レポートには各自なんらかの問いを立て、それを論証してみることを課題とした。昨年の反省から、極力感想文を避けるために、参考文献（インターネット上の資料も含む）にあたること、あつた際には引用元を明示することなどレポートの書き方も説明した。詩に関してはテスト内で問い、日本の場合男女においては言葉遣いや感情の表現が違うことに着目し、女性の気持ちを男性が描いたり、男性の気持ちを女性が描いたりする点に関してどう思うか、簡単に意見を書いてもらった。

## 最後に

お読みいただいたのであればおわかりの通り、従来の英文学講義からはかなり逸脱したものになってしまった授業である。これが「英詩」の授業か、と諸先生方からお叱りの声が聞こえてきそうな気配が十分にするのだが、私は先にも述べた通り、短大の専門科目であること、また彼女たちは英文学の専門家を目指しているのではなく、もう間もなく社会に出ていくものたちであることを考慮にいれ、学問、この授業であれば「英詩」、というものが大学という枠内に閉ざされたものではなく身近にあるものであり、たとえば今後生きていく中で何かにつまずいたのなら時折振り返り、自分と照らし合わせて生きるヒントにしてもらいたいと思っているのである。よって、単に知識を授けるのではなく、物事が学ぶノウハウ、情報を整理し感情や思いを上手に表現することに焦点をあてた授業構成にしたのである。決して無意味な逸脱ではなかったことをご理解いただければ幸いである。

また、本稿を執筆している現在は06年度夏であり、06年度後期のことは残念ながら本稿内でお伝えすることはできない。上記の経緯を踏まえてさらに計画していることがいくつかあるのでそれはまたいつかの機会に執筆、あるいは発表したいと思っている次第である。

なお、この「英詩鑑賞」は本学の新カリキュラム導入により本年度（06年度）をもって終了、閉講となる。この科目が本学に設定されてから今までに担当されてきた先生方の授業と比べて



劣るものであってはならないというプレッシャーと私は常に闘ってきた。私とその最後の担当者になれたことを光栄に思うと同時に、どんな理由からであれ私のこの授業を選択して履修してくれた学生に感謝の意を表したい。当たり前であるが、自ら履修を望んでくれた学生諸君がいなかったならばここに記した全ての試みは何一つなかったのだから。

#### 資料1 06年度シラバス

| 授 業 科 目 名       | 英詩鑑賞  |
|-----------------|---|
| 学 期             | 通年  |
| 単 位             | 2   |
| 必修・選択の別         | 選択  |
| 学 年             | 2年  |
| 担当者教員名          | 関戸冬彦  |
| 1. 授業科目の目的および概要 | <p>文学とは何か、詩とは何か、そしてそれらを読み、批評するとはどういうことか。まずこの点について確認し、その上で詩人、作品へと踏み込んでいく。各自が単なる感想だけ述べるのであればなんにも授業、いや学問として詩を取り上げる意味などないだろう。そうではなく、詩に触れ、そこに何を見たのかを「客観的」に表現することができれば各自のココロをより明確に分析し、一段上の自己表現ができるようになるはずである。この授業は英語で書かれた詩を題材に扱いながら、こうした表現方法（これは日常生活を送る上でも非常に有益であると思う）を身につけ、かつ語学としての英語力も向上させようという主旨のものである。つまり、英語、日本語といった我々をとりまくコトバに注目し、それらと上手につきあえる方法を探ってみよう、というのが主な目的といえる。</p> <p>実際の授業ではビデオやCDなど、紙の上だけでなく視聴覚メディアも多用し様々な視点から詩（時には歌詞も）を研究する。特に映画で引用されている詩や詩人にはその都度該当場面を見てもらうつもりである。このように、毎時アプローチが違うので楽しみながら詩に触れることができる、はずであると信じているし、そう感じてくれればと思う。</p> |
| 2. 授業内容および授業の配分 |   |
| <1週>            | 授業ガイダンス「文学とは何か？傑作とは何か？」   |
| <2週>            | レポートとは何か？シェイクスピアって誰？  |
| <3週>            | 「ロミオとジュリエット」はなぜ傑作？  |
| <4週>            | 「ロミオとジュリエット」の映画をめぐる   |
| <5週>            | 「ロミオとジュリエット」にまつわるエトセトラ  |
| <6週>            | 「いつか晴れた日に」とシェイクスピアのソネット   |
| <7週>            | 歌詞を詳しく眺めたら・・・ その1   |
| <8週>            | 「ブリジット・ジョーンズの日記」とキーツ  |

|                |                                       |
|----------------|---------------------------------------|
| <9週>           | 「ブリジット・ジョーンズ」は勝ち組それとも負け組？             |
| <10週>          | 「哀愁」と蛍の光                              |
| <11週>          | 「哀愁」とロングフェロー                          |
| <12週>          | 「マディソン郡の橋」と W.B.イエイツ                  |
| <13週>          | 「マディソン郡の橋」はなぜ4日間？                     |
| <14週>          | これまでの詩・詩人を振り返ってわかること・その共通点と相違点        |
| <15週>          | 歌詞を詳しく眺めたら・・・ その2                     |
| <16週>          | アメリカ詩に触れてみよう                          |
| <17週>          | スプリングスティーン、そして「いまを生きる」                |
| <18週>          | 「いまを生きる」とホイットマン                       |
| <19週>          | 「いまを生きる」とソール・ベロー                      |
| <20週>          | 歌詞を詳しく眺めたら・・・ その3                     |
| <21週>          | 「卒業」とミセスロビンソン                         |
| <22週>          | サイモン&ガーファンクルと明日に架ける橋                  |
| <23週>          | 歌詞を詳しく眺めたら・・・ その4                     |
| <24週>          | 「スタンド・バイ・ミー」をいろんな角度から                 |
| <25週>          | ビートルズとジョン・レノン                         |
| <26週>          | ジョン・レノンはなぜ殺されたのか？                     |
| <27週>          | 「ライ麦畑でつかまえて」とロバート・バーンズ                |
| <28週>          | ホールデンのココロをおいかけて                       |
| <29週>          | アメリカ詩・アメリカ文化の総まとめ                     |
| <30週>          | 「文学とは何か？傑作とは何か？」についての最終答弁             |
| 3. 指導方法        |                                       |
| 4. 試験評価方法      | 出席，小レポート（宿題），学期末レポートを総合的に評価           |
| 5. 使用テキスト・教材など | 毎時必要に応じてプリント配布                        |
| 参考書・その他        | 映画で英詩入門（平凡社），アメリカ文学案内，イギリス文学案内（朝日出版社） |

## 資料2 06年度前期小テスト

問1 以下の英文を日本語に訳しなさい。

1 During the height of World War II, a film was released that captured all the pain and bittersweet love of a wartime romance—*Waterloo Bridge*.

2 This journey and ultimate triumph is one that not only appealed to young women, who were highly attracted to the initial novel, but to young men as well: both could identify with Bridget's desperate search for love in a lonely world.

3 Between the wooing and wedding, however, there is a lot of heartbreak, and it is during these painful times that the two sisters reach out to each other for support.

4 Do you ever wonder what your life would be like if you had only stayed with your high school sweetheart, gone to a different school or decided to study overseas?

**資料3** 英詩鑑賞課題 *Who is Japanese "Bridget Jones"?* (一部抜粋)

1 ブリジット→村上智子 (森三中) シチュエーション→ラストのマークと抱き合ってる場面。村上泣きながら台詞→「マーク、今言ってくれたでしょ。心の中で…愛してるって言ってくれた」マーク：「聞こえちゃったか…」 漫画 NANA；第一巻より引用☆

2 Bridget Jones 役 梨花 シュチレーション 最初の方でオフィスで上司が口説いてきた時の独り言！で「この思いを伝えよう、今、心のまま」 参照；Two as one

3 Bridget →『杉田かおる』『花には人間のようなかけひきがないからいい ただ咲いて ただ散ってゆくからいい ただになれない 人間のわたし』By みつを  
シュチュエーション→『浮気現場を見た時、三角関係になった時』

4 ・ブリジット役⇒篠原涼子

・映画の中で使う詩⇒『あなたはだんだんきれいになる』智恵子抄/高村光太郎  
おんなが付属品をだんだん棄てると/どうしてこんなにきれいになるのか/年であらわれたあなたのからだは/無辺際を飛ぶ天の金属。/見えも外聞もてんで歯のたたない/中身ばかりの清冽な生きものが/生きて動いてさつさつと意欲する。/おんながおんなを取りもどすのは/こうした世紀の修業によるものか。/あなたが黙って立っていると/まことに神が造りしものだ。/時時内心おどろくほど/あなたはだんだんきれいになる

・シチュエーション⇒主人公は30代のキャリアウーマン。仕事にかまけるばかりに、自分の容姿はあまり気にせず、化粧つけもあまりない女性。しかし職場の上司のKは、そのさっぱりとした彼女の色気に惹かれる。そして彼女の魅力をこの詩にこめて言う。

5 主人公→杉田かおる シチュエーション→TVを見ながら、酒を飲みタバコを吸うシーン  
セリフ→「未婚、子なし、30代以上の女性これが負け犬である。やらないで苦勞するくらいなら、やっ  
て後悔した方がいいが生きるスタンス。そおやって身の程を忘れ、楽しいか楽しくないかを基準に生  
きていくと気がつけば女は負け犬になっているのだ」 出典→[負け犬の遠吠え] 酒井順子

**参考文献** (授業で用いた資料を含む)

大田雅孝, 野田研一, 木下卓編著『楽しく読める英米詩』, ミネルヴァ書房, 1996年。

関戸冬彦『『ロミオとジュリエット』を使った高3ライティング授業』, 『ねびゅらす』32号, 2004年, 73-84頁。

野町二, 荒井良雄編著『イギリス文学案内』, 朝日出版社, 2002年。

藤井哲郎, マイケル・プロンコ『一流の朗読で聴く名文—[教養ある英語]「型」学ぶ』, マクミランランゲージハウス, 2003年。

松浦暢編著『映画で英詩入門』, 平凡社, 2004年。